

事業活動報告 NO.3

平成24年度 FDのための情報技術講習会 開催報告

1. はじめに

本講習会は、情報通信技術（ICT）を活用した双方向授業を実現するための教材作成や授業設計の技能や知識の習得を目的とし、「プレゼンテーションコース」、「プレゼンテーションアドバンスドコース」、「授業デザインコース」の三つのコースを設定し実施された。

平成25年2月26日～30日にかけて、大阪経済大学において、57名（40大学、2短期大学）が参加し、本講習会が開催された。初日午前中に、アクティブ・ラーニングのイメージを共通理解するため、主体的な学修を展開するための授業の仕組みについて4大学から授業事例の紹介があった。今年度も、共通講義に対する受講者の評価は高かったように思われ、アクティブ・ラーニングへの転換に向けたICT活用の視点について気づきをもたらすことができた。今後もタイムリーでかつ各参加者が設備投資や人的支援が無くても実現可能な事例を紹介していくことが重要であろう。さらに、参加者全員を対象に、高等教育における著作物の利用法についての講演が行われ、活発な質疑応答が行われた。共通講義終了後、三つのコースに分かれ講習会が行われた。講習会終了後回収したアンケートによれば、参加者の講習会に対する印象は良いものが多かった。また、この講習会の特徴は、参加者にリピーターが多いことである。これは、講習会の内容もさることながら、講習内容にグループ演習が多く取り入れられているため、講習会終了後も参加者間での交流があり、各大学間の情報交換に役立っているためと考えられる。

以下に、三つのコースによる講習会について報告する。

2. 講習会

本年度は、パワーポイントの使用を前提として、アクティブ・ラーニングを見据えた教材作成と効果的な授業の構成法の習得を目指した「プレゼンテーションコース」、知識の理解と定着を効果的に促進するため、アクティブ・ラーニングを見据えた新たな視点によるビジュアルプレゼンテーシ



ョン技法の習得を目指した「プレゼンテーションアドバンスドコース」、ICTを用いた双方向授業の設計と授業の進め方について、学生が能動的に学ぶ授業を実現するための基本知識と技能を深めることを目指した「授業デザインコース」で講習会が行われた。いずれのコースにおいても、学生が主体的に問題を発見し、解を見出していくアクティブ・ラーニングを行うための授業シナリオの作成が基本となる。シナリオ中に視覚情報、学生への問いかけ、学生同士での議論等を効果的に盛り込むことができれば、効果的な授業を展開することが可能となる。シナリオを効率よく実施するためには、ICTの利用が不可欠である。本講習会の特徴の一つは、ICTの普及に尽力してきた本協会が開催している点にある。また、ある教員が、自分で行っている講義、講演、研究発表の内容について第三者から忌憚のない意見を聞く機会は非常に少ないはずである。この講習会では、いずれのコースにおいても、講習の内容を取り入れて作成したシナリオによる模擬授業を行い、お互いの授業を評価するピア・レビューの時間を設けている。これにより、自分の作成したシナリオを客観的に評価できるという点が、本講習会のもう一つの特徴である。

(1) プレゼンテーションコース

本コースは、マイクロソフトのパワーポイント2010を用いたプレゼンテーション技術を基礎から学び、分かりやすく効果的な授業を行えるように

することを旨とした。まず始めにプレゼンテーション技術の基礎的テクニックの再確認を行った。パワーポイント2010は2007へのバージョンアップに比べると大きな変化はなかったが、ここではメニューにある機能の再確認のため、講義形式で基本機能の説明を行い、引き続いて各自でプレゼンテーションの作成を始めた。受講者のほとんどが問題なく基礎的な技術をクリアしていた。少し高度な使い方として、アニメーションを、単なる面白い表示方法としてではなく、考えさせる間を作り出す方法の一つとして使用する例を示した。また、画像、動画、音声の取り込み、興味を引く効果的な授業作りを目指して、図形、SmartArt、図（写真、絵）、クリップアート、スクリーンショット、動画、音声の挿入方法を紹介した。最初は講義形式で、画像ファイルや音声ファイルの種類を説明した。受講者には聞き慣れない技術的な内容も含まれていたと思うが、授業プレゼンテーションを作成する際に必ず遭遇するトラブルを解決するためには、必要な事柄であることが理解されたと思う。その後、受講者各自が準備した写真や絵などの授業用素材を使って実習を行い、授業用プレゼンテーションの骨格作りを行った。スライドの枚数が増えた頃を見計らって、スライド間リンクや目的別スライドショーなど、スライド資源を有効に活用する方法や、ハイパーリンクによる様々な外部資源の利用へと話を進めた。講義中や実習中にも適宜作業を中断しながら、リハーサル機能の説明や、質問の多い事柄について詳しく説明した。受講者が日頃から疑問、あるいは一度やってみたいと思っていたことなどの質問にはそれぞれの机を廻って、1対1で対応した。質問の中には、講師も余り使わない機能もあったので、その都度、講師が使い方を確認してから応えるという手順を踏み対応した。それぞれ作成した授業プレゼンテーションのピア・レビューでは、初めて互いの専門分野を知ると同時に、今回のコース受講によって得た技術を用いて授業プレゼンテ



ーションを評価し合い、活発な意見交換が行われた。

アンケートからも、今回のコース受講によって、知識伝達型から、授業シナリオに即した双方向型の授業プレゼンテーションを作成できるようになったという反応が多く寄せられ、コースの目的が達成できたとの印象を受けた。一方、写真や動画など、日々複雑に進歩するデジタル環境の中で、プレゼンテーション素材作成に関するより詳しい知識を得るためには、事前にコース内容を説明して欲しいという意見もあり、今後のコース運営に活かしていく必要を痛感した。

(2) プレゼンテーションアドバンスドコース

本コースは、アクティブ・ラーニングでのICT活用を見据え、プレゼンテーション手法や近年関心度の高い学修管理システム（LMS: Learning Management System）およびタブレットPCを用いた授業展開のための知識・技術の習得を目標とした。なお、本コースはプレゼンテーションコースの発展的内容を扱うことから、対象者をパワーポイント等によるプレゼンテーションを自身の授業の中で日常的に利用できる技術を持つ方とした。

プレゼンテーション手法に関しては、グラフィカルな手法やズームングプレゼンテーションと呼ばれる新しい手法など、より学習者の注意を引くための方法について実習を行った。

アクティブ・ラーニングでは、授業内での能動的な学修の重要性はもちろんのこと、授業外での学修も欠かせない。この学修サポートに関して学修管理システムLMSの活用が有効であると考えられる。そこで、今回の実習でもLMSの活用方法に関して実習を行った。実習では、各大学におけるLMS導入状況の多様性に配慮し、運営委員会側でオープンソースLMSを準備し、各種LMSで一般的に利用可能な機能に限って、その利用方法を実習した。また、インターネット上で提供されている無償のクラウドシステムを用いた情報共有手法に関して実習を行った。

タブレットPCに関しては、受講者が個別に利用するのに十分な機材を準備することができず、メーカー、サイズの異なる各種タブレットPCを数台設置し、デモを中心に、学習者の個別の要望に対応する方式で講義を展開した。

本コースは技術の習得に注力してデザインされており、受講者もコースの目標にマッチした目的をもって受講している方が多く、事後アンケートの結果からも、満足度は概ね高かった。難易度としても、簡単および適当とする回答が多く、その意味では適度な内容であったと思われる。ただ、

やや実習の時間を多めに確保したこともあり、実習全体が間延びした印象であった。これに関しては、アンケートで要望の多かった、より実践的な実習を加えるなどして、メリハリの効いた内容展開の検討が必要と思われる。

プレゼンテーション自体に関するICTは着実に浸透してきている。今後は、いかにそれらを用いて授業を行うか、そのための授業設計をどのようにすべきかが重要テーマになると考えられる。特に近年着目されているアクティブ・ラーニングを授業に生かすには、授業設計、運営、ICTを有機的に統合、活用する必要があり、今後のコース設計上考慮すべき点である。一方で、タブレットPCなど、授業の形態を変容させるような技術が次々に生まれている現状もあり、それらを教育に生かすための手法・技能の習得支援は、今後とも扱っていくべき内容と思われる。

(3) 授業デザインコース

本コースは、ICTを用いた双方向授業の設計と授業の進め方について、学生が能動的に学ぶ授業を実現するための基本知識と技能を深めることを目指した。授業法は、その教科、教員、対象学生によって、相対的に組み立てられ時間軸や状況によっても大きな異なりを見せ、多種多様な工夫と方法が求められる。欧米、特に米国の事例を見ても十数年来、概念としてのFD (Faculty Development) からED (Educational Development) に向かい、教育の質が大きく向上した。これには、PBL (Problem Based Learning) 等の教育方法の発展が遂げられる。このような状況下で、教育の本質である知の蓄積と再構築・活用を教育の成果として求める声は切実に高まってきているが、教育界が十分に対応できていないのが現状である。これらの要求に応えるためにも、従来の成果に増して自学自習を促進し、知の活用の向上に向かう一手法として多くの教授法を組み込み、教員各自の創造的教育法の展開を促進していく必要がある。そのためにも米国で展開されているアクティブ・ラーニングの手法を紹介することで、各自の教育方法の展開を促進するものとする。

画一的教育方法は本来存在しないのと同様に、普遍的に展開できる教育方法も存在しない。本コースでの試みは、TBL (Team Based Learning) とPBLを組み合わせることで、協調的で協力的な学修と、一人が一人分学修するのではなく三人が五人分学修し、新たな生産を現実体験として実感することに意味がある。さらに知を共有することも必要になり、これにより、自学自習が積極的に展開される。

本コースの受講者は、実習において以下の三つの問題点に直面したと考えられる。

一つ目は、短時間で集中状態に入ることが難しかったこと。二つ目は、講習会のため“ How to ”の要求が高かったこと。三つ目は、ピア・レビューは、まとめであるにもかかわらず、自主的な論議の展開が不十分な状態で行ってしまったことである。これらの問題点は、この講習会そのものも、従来の教育概念からの脱皮を求められていることを表している。一つ目については、学習の経験によって習得できると考えていたが、脱皮のために、委縮しない程度の刺激的な提案が必要であったかもしれない。二つ目は、実質的には“ How to ”なのだが、内容を体験し理解することと、自らの科目へ展開し活用することを短時間に如何に組み込むかで解決できるであろう。三つ目は、受講者間で事前に実習を体験する必要があるかもしれない。さらに、このような学習方法は一義的でないが、短時間の講習会である故に意図は薄まるものの、一義的な枠組みの中でより具体的に取り入れる必要がある。あるいは、多種を同時に提示する方がよいのかもしれない。この部分は今後、大いに検討する必要がある。教員は本質的に自らの教育方法に拘りを持つが故に「参照・参加」と教育方法そのものも論議しながら組み立て、持ち込む方法も考える必要がある。この課題は、本質的であるし極めて面白い課題でもある。次年度への更なる展開も期待されたい。

3. 今後の講習会

近年のICTに対する大学教員のリテラシーは格段に進歩している。この様な状況の中で、プレゼンテーションソフトをいかに上手に使用できるかではなく、これらの道具立てを上手に使いながら学生が自ら学修できる環境を整備し、授業を行うかがすなわちFDである。本講習会を「FDのための情報技術講習会」としたのは、ICTを使うことで、学生の学修に対する動機づけ等、学生が自ら進んで事前・事後学修を行う授業を教員に展開していただくためである。今後も、ICTを活用した授業をどのように展開すれば学修効果が上がるのかをこの講習会で発信していきたい。

文責：FD情報技術講習会運営委員会
委員長 田宮 徹